15 「積分（学）」に見立てた「教育協働」の手順?!だが、やはり？それだけでは?!

堂本　彰夫

(1) あくまでも、「積分（学）」は考え方（哲学？）であり、その手順を持続させていくことが重要なのである?!

ということで、ここでは、改めて、先号（14）で書こうと思っていた標記テーマであるが、折角準備していたので、思いも新たに、書き記しておきたい！ただし、先号で見たように、言わば、この「衒学げんがく」的な論は、今やまったく不要な気もすることを、ここでは、予め、そして、率直に名状しておきたい！要は、最前線で働く「思いの（心）ある人」が、別の「思いの（心）ある人」に出会い、力を合わせて、地道に、そして「元気よく」、その「思い（心）」を実現しようしていけば、そんな理屈なんか、ほとんど吹っ飛んでしまうということである！多少？複雑ではあるが、本当に素晴らしい！その一言である！

しかるに、先々号（13）では、最後に、これからの「教育（学）」には、まさに「積分（学）」の考え方が必要であるということを、あまりにも突然（突飛？）に出したように思う?!とりわけ、そこにおける「導関数」とか、「微分係数（傾き）」とか言って（ある意味、ほとんど分かってもいないのに？）、結局は、煙に巻いた（自己陶酔した？）ようにもなっているということである?!そこで、本号では、そのことをもう少し冷静（精緻？）に、そして、そこに、さらにもう一つ重要なことを付け加えることを目的に、さらなる（それなりに意味のある？）論をなしていきたい。そういうことである！

まず、件の「導関数」とか「微分係数（傾き）」とかということであるが、ある最高次数の関数であると見做される？（無数の要因が関係してくる！）「生涯教育（学習）（論）」は、それだけでは、余りにも高次（多面的、多元的？）過ぎて、その完全体は、具体的な数式では表せない（その次数自体は、ある意味無限大？であるので、現実には作り得ない?!そういうことでもある?!）！しかし、N（N→無限大？）次関数というようには表現できる?!要は、数限りない要素（N→無限大？）が、それに関わっているということであるが、そのためのしくみづくりの手順・関係を発見、持続させていくことが重要だということであり、それが、あたかも、「積分（学）」の考え方（哲学？）と通底するのではないかということである?!

とは言え、ある時期、ある場所においては（前提としては、それぞれの市町村自治体を想定しているが、そこにある、個々の学区／生活コミュニティでもよい?!）、その一定の姿・形は作り得るので（その時点では、具体的なN次関数となる！）、その実現に向けて邁進すればよいということになる?!つまり、そのNは、ある意味便宜的ではあるが（そこの場所・地域においてのみ通用するということ→N_1～N_N）、そこの場所・地域で、全力を挙げて実現すべき課題・目標となるものということでもある（例えそれが低次なものであっても？ただし、それが、その後の取り組みの核となることが重要となる！）?!

であれば、そこで必要となってくることは、それぞれに見出された、言わば「N次関数」（課題目標群 or 計画体系）を、ある時点毎に微分し（その時の「個別課題群」を抽出するということ→それが、「導関数＝（N－1）次関数）」を求めることになる！）、その時々の具体的な課題・目標を表出させる（共有する）ということである（それが、まさに微分係数（傾き）をはじき出すということとなる！）?!そして、次に、それに基づいて、数ある課題・目標の中から、ある特定の課題をそこに結びつける（いわゆるXの値を代入するということ→ただし、そこには、無数のXが存在し得るので、そのXは、その時、その場所に最も相応しい値ということになる！）ということである（それが、その時々の、つまり、その場所・地域での「解」であるということになる！）?!

(2) 大切なのは、その時々に、苦労してでも、協力して「必要な総和」を生み出し、広げていくこと！

ただし、問題は、ここからである！数学の考え方（積分のやり方）としては理解出来たとしても、実際の課題・目標を、いかに見出していくか（と言うよりは、その課題・目標群の整序化）は、現実的には、かなりの困難が待ち受けている?!何故なら、そこに見出される課題・目標は、それこそ、人（関係者 or 部署）の数ほどあるわけであり、ましてや、それらは、法制度や、それに基づく組織体系（実施系統）が、基本的にはバラバラであるからである?!俗に言う、「縦割り行政」の存在であり、各々の存在意義の強固な主張（縄張り意識？）が、大いに、それらを阻害する（かもしれない？）ということである（最前線で、純粋に奮闘する人達、例えばボランティアのような人達には、それらは、大変迷惑な話ではあるが！）?!

とは言え、それは、ある意味では、とても簡単なことなのではある?!積分とか、導関数、微分係数（傾き）とか出しては見たが、それらは、あくまでも数学としての話であり、言わば「後付け（ひょっとしたら「こじつけ？」）」の話でもあるということである！大切なのは、今なすべきことが何なのかが、ある時点で、関係者（しかもその時々の！）に共有されればよいというだけのことなのである！言い換えれば、それで終わりなのではなく、その時々から、新たに生じてくる問題・課題を正しく掴み、そしてそれをまた、同じような考

え方、段取りで進めていく（繰り返していく）、そういうことが必要なのだということである！繰り返しになるが、そうした視点、手順、関係が、ここでいう「積分（学）」だということであり、その時点、その時点における「必要な（成果の）総和」が、そこに見出されていくということが、大切だということである！

したがって、そうであるならば、そういう小難しい理屈？（積分学）など、実際には不要なのではないかという節もあろうが（実は、本当は、そういうことでもあるが！）、現実には、先にも述べたように、そうした問題・課題の解決手順を踏むことは、極めて難しく、しかも、それが、究極的には（総論としてはということでもあるが！）、万人が必要と思える「生涯学習体系／生涯学習社会の実現」につながるものだという実感（確信？）が得られるものであるならば、それに勝るものはないと言えるのでもある?!よく、「持続的な発展」（→ＳＤＧs）とか言うように、現実的に持続できる（sustainable）ということが、今や大切な視点、要素なのである（そういう意味では、ここに、その後停滞している？「生涯教育（学習）」論議が、新たな第一歩、否、二歩を歩み始めるとも言える？）?!

⑶ 改めて、「必要な（成果の）総和」はあるものではない！だから、（永遠に続く？）英知が必要なのだ！

ところで、最早明らかではあるが（ただし、残念ではあるが？）、その「必要な（成果の）総和」は、最初から「あるものではない」！つまり、アプリオリ（先見的に）に、そこにあるものではなく（理論的／理想論的にはあったとしても？）、その現実体は、関係者達（極論すれば、国民一人一人が？）が、常に冷静に、しかもある時は、言わば歯を食いしばって？、創り出していくものである（その意味で、その完全体は、永遠に現出し得ないものでもある？）?!たとえその時は、それでよいと思えるものでも、時が経ち、状況が変化すれば、次から次へと、新たな問題・課題が飛び出してくるということでもあるが、人の世は哀しい？もので、取り組み（苦労）における齟齬や仲違い（面子とか、勢力争いも含めて！）は、ある意味常態なのでもある?!

だからこそ、そこにおける一番有効な考え方（対応の仕方）は、そこにある最も大切な要素である「協働」（たとえ、その時は細やかなものではあっても！）、そのプロセス・成果を、常に担保し、継続・発展させていくということである！けだし、現実には、様々な動き・対応の仕方が出てこよう（対立、乱立しよう？）とも、そのことだけは、まさに「不文律（英知）」として、関係者相互が有しているということが重要であるということである（例えば、1990 年代に、「生涯学習のまちづくり」というような施策・事業が活発に展開されたが、実は、そこにおいて最も必要であったことは、その「不文律（英知）」を明文化（推進大綱・諸計画に明示）することではなかったかと、改めて思う次第でもある?!）！

もちろん、その芽だしや雰囲気は、それなりにあったとは言えるが（教育基本法の改定、特に「第３条（生涯学習の理念）」の新規定が、まさにそうである！）、残念ながら、その具現化のための重要な（ある意味必須な！）方法論、すなわち、「『学校教育』と『社会教育』の協働によって、それを実現する」という「不文律（英知）」の明示にまでは至らなかった?!本当に、残念であるし、悔しいの、一言でもある！

そこで、改めて、最後になるが、この間、様々なこと（多方面での組織改編／名称変更等を含む！）が去来していった（多少懐古主義的ではあるが、今の私からすれば、このような表現ともなる？）！上記の「生涯学習のまちづくり」、あるいは「生涯学習の理念」の法規定もそうであるが、その後の、文科省並びに地方の教育委員会の組織改編・名称変更等（そこには、社会教育関係者の不満や怒りもあるが?!）、そして、そこから出てきた「総合教育政策」という方向性、「地域学校協働活動」、さらには、学校教育側の「社会に開かれた教育課程」の登場等（内実は、まだまだ十分とは言えないが？）、かなりの変化が見られるということでもある?!

それ故に、私自身は、大枠では（全体としては？）、それなりに前進しているのではないかとも思っているということであるが（多少、否、かなり誤解を招くかもしれないが？）、ただ一方で懸念されるのは、いじめや不登校の数が、過去最高という情報もあるが、「教員の働き方改革」の動きにも見られるように、多くの関係者達の苦悩や苛立ち？も、過大なものがある?!それらを、いかにして解きほぐしていけるのか？しかも、そこに、それぞれの関係者の、言わば「苦労のし甲斐」があるのかどうか？そこに、ここで述べた「積分の考え方」、つまり「協働」の真価が問われるということでもある！

ちなみに、私自身は、そうした「苦労をしている人」のごくごく一部ではあるが（それは、学校教育関係者であろうが、社会教育関係者であろうが、一向にかまわない！要は、「思いの（心）ある人達」ということである！）、可能な限りの支援、しかし出来るのは、大いなる声援を送るだけかもしれないが、それを続けていきたいということである！とりわけ、収入や身分の保障もなく、その思い（心）だけで頑張っている人達には（例えば、心細い「指定管理」を引き受け、頑張っているＮＰＯ法人や一般社団法人のみなさん達→前号で紹介した、二つの法人のみなさん！）、是非とも頑張って欲しいと念じている次第である（本当は、給料も身分も、それ自体には、何の問題もなく、仕事をしている人達に、頑張って欲しいのではあるが？）！

（つづく）